

歴史遺産と都市文化創造

世界から大阪へ

はじめに

《「歴史遺産と都市文化創造」プロジェクト》

大阪市立大学 21 世紀 COE プログラム研究拠点「都市文化研究センター」では、2002 年 10 月の採択以来、A「比較都市文化史研究」、B「現代都市文化研究」、C「都市の人間研究」の3つの研究教育チームを編成し、拠点の研究テーマである「都市文化創造のための人文科学的研究」を推進してきました。

「比較都市文化史研究」チームは、歴史的な研究に加えて、都市のもつ歴史遺産をこれからの都市づくりにどう生かすのかという、現代的な課題にも取り組むため「歴史遺産と都市文化創造」プロジェクトを実施しています。このプロジェクトの当初の事業計画は次のとおりです。

- 1) 立地条件、歴史的背景等の点で大阪市と類似した特徴をもつ海外都市を選び、それらの都市において、歴史的な文化遺産がどのように現代の都市文化創造に生かされているのかを現地調査する。
- 2) 各調査の成果を持ち寄って A チームの月例研究会で報告し、歴史遺産と都市文化創造との関連について包括的に検討する。その際には、研究拠点の所在地である大阪市の都市文化創造にどのように寄与できるか、という課題に留意する。
- 3) 研究の成果を報告書としてまとめ、都市文化研究者はいうまでもなく、大阪市をはじめとする自治体関係機関にも配布して、都市文化創造へ向けての問題提起を行なう。

《2004 年度の調査・研究活動》

2003 年度は SARS の影響もあって、欧米都市を対象として海外調査を行ないました。その成果は、A チーム第 13 回研究会（ミニ・シンポジウム、2003 年 10 月）で報告され、『歴史遺産と都市文化創造——世界から大阪へ——』（大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター、2003 年 12 月）にまとめられています。

引き続いて本年度は、前年にできなかったアジア都市の調査を実施することになりました。昨年度の報告書にも記しましたように、2003 年度に海外調査を行なった報告者から異口同音に、都市文化の創造へ向けて歴史遺産を活用する場合、博物館が重要ではないかとの指摘がなされました。そこで本年度は、アジア都市を対象とする一方で、都市文化創造における博物館の役割に焦点を当てることにいたしました。

幸いにも 2004 年 3 月 17 日～5 月 10 日に、大阪歴史博物館が、大阪・上海友好都市提携 30 周年記念事業として、「上海博物館展」を開催しておられました。この特別展を担当された同博物館の佐藤隆氏（第 1 学芸係長）に、上海の歴史遺産と都市文化創造に関する調査をお願いしましたところ、展覧会を通じて築かれた両博物館の連携体制のもと、短期間で充実した調査をしていただくことができました。

また、「世界から大阪へ」のサブタイトルにふさわしく、文化集客都市をめざす大阪市の担当部局である「ゆとりとみどり振興局」にも参加をお願いし、大阪城天守閣の主任学芸員北川央氏から、大阪市の歴史遺産・文化財の研究と活用の最前線における活動についてご報告いただけることになりました。

さらに、都市文化創造の問題に多角的に取り組むため、本年度も歴史学以外の分野の方にご報告をお願いすることにしました。昨年度は、オーストリア文学の松村國隆氏によるトリエステ調査報告がありましたが、今年度は考古学と文化人類学の専門家のご参加をいただくことにしました。ちょうど 2004 年度の事業計画が検討されていた時、日本考古学の岸本直文氏が釜山で在外研究に従事しておられましたので、釜山における歴史遺産と都市文化創造について現地調査をお願いしました。また、文化人類学の多和田裕司氏には、昨年度の中野報告がバンクーバーを対象として論じていた多文化都市における歴史遺産の問題を、歴史学とは異なった視点から再検討すべく、クアラルンプールについてご報告いただくことにしました。

《第2回シンポジウム》

これらの調査・研究の成果を持ち寄って、**2004年11月**に第2回のシンポジウムを開催しました。本報告書はその記録です。シンポジウムをほぼそのまま再現していますが、以下の点についてプロジェクト責任者の判断で修正を加えました。1) 中野氏より多和田報告に対して出された詳しい質問は、中野氏にお願いして、別途にコメントというかたちにまとめてもらいました。もちろん質問の内容に変更はありませんし、多和田氏の回答はそのまま討論の記録に掲載しています。2) **COE** 研究員の図師氏は、討論のなかで簡単に表明された感想を、『都市文化研究』第5号の論稿のなかでより詳しく述べておられましたので、改めてその論点を、やはりコメントというかたちで本報告書に書いていただきました。3) 上記1) 2) とも関連して、討論の一部は順序を変えて収録しています。

昨年度の第1回調査報告会はミニ・シンポジウムと銘打ちました。半日の集まりであり、参加者も限られていたからです。本年度も「第2回ミニ・シンポジウム」という名称で開催しましたが、その記録をまとめた本報告書では、あえてミニという言葉はせず、第2回シンポジウムと称させてもらっています。釜山の文化遺産の全体像をまとめた岸本報告をはじめ、昨年度にも増して充実した内容となっていると自負してのことです。手前味噌かもしれませんが。各報告・コメント・討論をお読みいただき、ご判断いただければと思います。

《都市文化創造へ向けて》

シンポジウムの終わり近く、**COE** 事業推進担当者の仁木氏より、私たち研究者は大阪市の都市文化創造にどのように寄与できるのか、という問題提起がなされました。報告者の一人、多和田氏のお答えにもありましたように、これはなかなか難しい問題です。ただ、研究と市民の接点ともいべき博物館で、この問題に日々直面しておられる北川氏（大阪城天守閣）や佐藤氏（大阪歴史博物館）からは、それぞれ示唆に富んだお答えがありました。とくに北川氏からは「報告書を出すことで成果とするのではなく、本当に都市文化創造に寄与するところまでやって欲しい」旨のご発言がありましたが、プロジェクト推進担当者一同、肝に銘じておきたいと思います。

もちろん私たちだけが考えるのではなく、歴史学や関連分野の研究者に加えて、大阪市をはじめとする都市の文化創造に携わっておられる方々に、本報告書をお読みいただき、

報告やコメント・討論についてご検討いただければ、より大きな成果が生まれるのではないかと思います。来年度、私たちのプログラムは、上記の事業計画の3)「都市文化創造へ向けての問題提起を行なう」の段階に入ります。過去2年の海外都市調査・研究の成果を踏まえつつ、ツーリズム・町おこし・町づくりといった、より現代的な問題とも絡めて、都市文化創造の課題を追求してゆく予定です。直接この問題に関わっておられる方々はもちろん、いろいろな立場から「歴史遺産と都市文化創造」に関心をお持ちの方々にご参加いただければ幸いです。

2005年2月

井上浩一

(2004年度プロジェクト責任者)